
難病と向き合ったから、知り得た事・・・

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

難病と向き合ったから、知り得た事・・・

【Nコード】

N4827BA

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

「いつものように、ごく普通の生活を送っていたコナン。ある日突然、コナンに病魔が襲い掛かる・・・未知不明の難病にかかってしまったコナン。みんなの思い・・・様々な気持ちが交差する・・・。病気になるながらも笑うコナン。恐怖の、余命宣告・・・いったいどうなってしまうのか!？」

病気の事は、現実ではないかも知れませんが・・・

そこは、無視でおねがいします。

第三作です！時間があったら、夕方掲載するかも知れませんが、主に、12:00掲載か予約掲載です。それでも、精一杯頑張りますので、よろしくお願ひします

・ 1 ・ いつもの平和な日常（前書き）

どうも、桔梗です。活動報告通り、第三作「難病と向き合ったから、知り得た事」記念すべき一話です。一樣、たくさん、書いてあるので、今日もう一話見たい！という方は感想にお願いします。限りがあるので、一日にまとめて5話とかは無理ですが・・・毎日更新の予定ですが、全て夜中です。我儘な作者で変な所で段落が変わり読みにくいかもしれませんが・・・よろしくお願ひします。

・ 1 ・ いつもの平和な日常

| 朝 AM 7:00 |

『・・・君・・・コナン君朝よ、学校遅刻しちゃうよ・・・起きて。』

いつものように、蘭の声で目覚めたコナンは布団から起き上がった。

「・・・おはよ。蘭ねーちゃん。」

コナンは、まだ眠い目をこすりながら言った。

『コナン君、顔を洗ったら、ご飯作ったから食べてね。』

言い終わった蘭は、朝食のある食卓へと向かった。

しばらくするとコナンは、顔を洗い終わり自分の席へと着いた。

《いただきます!》

三人が、声を合わせて食事の挨拶をし、一斉に食べ始めた。

| 40分後・・・ |

三人とも、食べ終わり蘭は全ての食器を片し、コナンは、学校の準備をしていた。

さらに、10分経つと、哀と少年探偵団が探偵事務所に来た。

コナンは、彼らと一緒に学校に向かった。

『見たかよ！昨日のサッカーの試合・・・』

『すごかったですよねー。』

『コナンも見たよな？』

『見たぜ！すごかったよな！』

コナンは、サッカーの事になると子供のようになる。いつものことだ。

それを見た哀は、クスツと笑った。それに気づいたコナンは、

「なに、笑ってんだよ・・・」

コナンは哀を見て、言った。

『名探偵さんも、サッカーの事になると子供みたいね。』

哀は、からかうように言った。

「・・・ほっとけ。」

いつもの会話をお互いに行っていた。哀は、コナンには気づかれて

いないが少し、
うれしそうだった。

・そんな会話をしているうちに、学校に着きいつものように小学校生活を過ごしていた。

・・・この時は、誰も・・・コナン自身も気づかなかった。コナンの身に、恐ろしい病魔が
襲い掛かってくるなんて・・・

・ 1 ・ いつもの平和な日常（後書き）

明日は、コナンくんですね！

今日は、書いたの4時なので 皆さんが寝ているかも 予約掲載です

とても、一話一話短いかもしれませんが……。そこは、ご勘弁を。

あと、学校生活がメインではないので、必要最低限の所しか書いてません。

学校生活の話が好きな方は、すみません……。

Next conan's Hint (笑)

体の異常

次回もお楽しみに！

- 2 - 突然の体の異常（前書き）

桔梗です！今、ちょっと時間あったので、更新します！

少し、質問です！

皆さんが、好きなコナンキャラは誰ですか？

答えは、感想の所やメッセージでお願いします（^^/）

- 2 - 突然の体の異常

1 昼 P M 12:00

給食の時間になり、いつもの給食の時間が始まった。子供達にとっては一番の楽しみだ。

『よっしゃ！一番！』

いつものように、一番に給食を食べ終わるのが元太である。そして、いつも残り屋さんのが・・・

『あーっ・・・また光彦くん人參残してるー。』

『あとで、食べるんですよー』

なんていう、言い合いがしょっちゅうだ。この時、コナンにはある異変があった。

いつもなら、完食するはずの給食がなぜか食べれないのである。その異変を察知した哀が、コナンに尋ねた。

『どうしたの?』

哀は、心配そうに聞いた。コナンは、正直な事を言わずに哀に嘘をついた。

「・・・へ?・・・いや、ちょっと考え事してただけ・・・」

コナンは、そう言い、哀に心配をさせないために無理やり口に給食を詰め込んだ。

哀は、その様子からひっかかる事はあったが自分の給食を食べ進めた。

給食が終わり、掃除も完了し下校の時間となった。

《さようなら!》

子供達は、元気に挨拶をし、少年探偵団達もコナンと哀に声をかけ、一緒に下校した。

のちに、別れる道となり、少年探偵団達とは、明日ねなどと言い合い、別れた。

哀とも、別れてコナンは一人となった。自分の体がとてもだるくなっているのを感じ、立ち止まった。

「（・・・なんだ？なんか、ものすごくだるい・・・）」

コナンは、歩けないほどのだるさに自分自身でも訳が分からなかった。

歩こうとしているが、足が動かず、腹痛と眩暈と熱が一気に襲い掛かってきた。

コナンのいる所はちょうど人通りの少ない所だったのか人は、全く通らない。

どんどん症状は悪化し、コナンは、その場に倒れてしまった。

- 2 - 突然の体の異常（後書き）

コナン君倒れてしまいましたー！どうなるのでしょうか・・・
今日は、まだ更新します。しばらくお待ち下さいネ

N e x t c o n a n ' s H i n t

意識不明のコナン

次回も、お楽しみに！

・ 3 ・ 帰ってこない・・・

1 P M 7 : 0 0 1

さすがに、遅すぎると思いコナンは博士の家にいると思ってコナンに、帰って来てと

コナンに言おうと博士の家に電話をかけた。

・・・プルルルツ・・・ガチャツ！

『はい。阿笠ですけど？』

電話に出たのは、哀だった。

「あつ・・・哀ちゃん？そっちにコナン君いるでしょ？もう、帰ってきなさいって、」

言ってくれないかな？」

蘭は、そう言ったが、哀から予想外の言葉が返ってきた。

『・・・え？江戸川君来てないけど？帰って来てないの？』

哀は、蘭に聞き返した。その言葉を聞いた瞬間に蘭は青ざめた。

「・・・うそ・・・コナン君、博士んちにいると思ったのに・・・」

蘭は、ものすごく焦った声でそう言い放った。

一方で、哀は昼のコナンの様子を思い出し、心の中で考えた。

『（あの時、江戸川君は食欲がなかったように見えた・・・あの後のが全部演技だとしたら・・・）』

哀は、一つの仮説を立てた。元々凄腕の科学者だ。頭の回転は早い。

『分かったわ。私達の方でも探してみるわ。』

「うん・・・お願い・・・哀ちゃん・・・」

蘭は、泣きながら哀との電話を切った。

――
哀は、予備の追跡メガネを引き出しから出し、スイッチをつけた。

ピコッ・・・ピッ!・・・ピッ!

追跡メガネは、反応した。

『(・・・やっぱり、バッジを持っていたわね・・・)』

しばらくすると、博士もトイレから戻ってきた。

哀は、博士に事情を説明し、一緒にコナンを探した。

『・・・この辺りだわ・・・』

そこは、人一人通らない道だ・・・

「新一!・・・」

博士は、大声で呼びかける。そして、哀も・・・

『・・・工藤君!・・・』

そして、そこに見つけた二人が見た光景は、とても真つ青だが、あきらかに熱があり
ピクリとも動かないコナンであった。その光景に二人は、驚きを隠せなかった。

「新一!!」

『工藤君!!』

真つ先に、駆け寄ったのは多少医学知識のある哀である。
コナンの脈拍を確認し、コナンに意識確認を施す。

『博士・・・救急車・・・』

博士は、驚きで最初の哀の声が聞こえなかったが、哀が必死に、

『早くっ!!』

その声には、必死さと助けたいという思いが詰まっていた。その声に反応し、博士は慌てて

119番に電話をした。その間に、哀はコナンの病状の確認をし

ていた。その病状は、一刻を

争うものだった。コナンは、呼吸が弱くなっており、熱も触らなくても分かるくらいに、

上がっていた。一番の問題は、気温が低い外に長い時間倒れていたのだ。コナンは、体力を

消耗し、意識を取り戻す気配がない。重病という事で、救急車はコナンを優先しこの場所に

来た。

『・・・ボウヤ・・・返事出来るかい？』

コナンは哀がやったように救急隊員に意識確認をされ、脈拍を確認されていた。

コナンの様子に一刻を争うと判断し、救急車に乗せられた。のちに、コナンの体には、

心電図モニターと酸素マスクが装着され、哀と、博士も、救急車に乗り込んだ。

・・・ピーポー・・・ピーポー・・・

救急車は、サイレンを鳴らし緊急のため信号を無視し、病院へ向かう。

そして、米花総合病院に着き、ストレッチャーで早急に運ばれた。

―米花総合病院―

『容態は？』

医師が救急隊員に聞いた。

「意識レベル200、呼吸心拍数が共に弱く、とても危険な状態です。高熱で長時間、外に倒れていたため体力が格段に落ちています。症状の原因が・・不明です。」

救急隊員は、申し訳なさそうに言った。医師は、救急隊員の言葉に了承し、

哀達にここでお待ち下さいと言った後、手術室へコナンを連れて行った。

すぐに、手術中 というランプが点いた。

・ 3 ・ 帰ってこない・・・（後書き）

徐々に、一話一話が長くなっていきます。（メインの場面に入るの
で）

今日は、アンコールがあれば、12時に更新したいと思っています。
どっちになるかわかりませんが・・・

Next conan's Hint

病気の発覚

また、明日。アンコールがあれば、12時に！では！

・ 4 ・ コナンに降りかかった原因不明の難病（前書き）

医師の名前は、テキストですが・・・

まあ、読んでみて下さい・・・

- 4 - コナンに降りかかった原因不明の難病

コナンは、学校帰りに途中で倒れてしまい、救急車で米花総合病院へと運ばれた。

しかも、容態が安定しないという事態で手術室へと運ばれた。コナンを襲ったのは何なのか？

その後、博士が探偵事務所に電話をかけ、蘭と小五郎が来た。三時間経ったが、相変わらず

ランプは点いたまま。手術室前にいる、博士、哀、蘭、小五郎は無事な事を願っていた。

一二時間後―

ランプが消え、一斉に一同が立った。手術室から出てきた医師は疲労が見え、明らかに

大変な手術だったと窺えた。

「医師の吉川です。コナン君は、」

一同は、息を呑んだ。ただ、ただ、無事で。と願っていた。

「一命は、取り留めました。」

一同に、笑顔があふれていた。だが、その笑顔は、一瞬にして消えた。

「ですが、コナン君は、我々でも病名が分からない病気にかかっています。」

一同から、代表で蘭が聞いた。

『・・・どんな、病気なんですか？』

蘭の声が、震えていた。医師は、眉を下げて言った。

「・・・内臓がどんどん壊死しているのです・・・」

一同は、とても驚いて声も出なかった。蘭は、耐え切れず涙があふれていた。

さすがに、哀も目を見開いていた。

「・・・全力を尽くしていますが・・・進行するばかりで・・・」

ただでさえ、落ち込んでいた一同に、更なる重荷が押し掛かる。

「・・・コナン君は、治療法が見つからない限り余命はもって半年か・・・」

蘭は、その言葉に声が出なくなり、しばらく沈黙が続いた。だが、沈黙を破ったのが小五郎だった。

『・・・治療法は、必ず見つかるんですよね？』

小五郎は、一同が聞きたかったことを口にした。見つかると言っ
てほしい・・・だが・・・

「・・・見つかる確率は、低いです・・・」

一同には、信じられない真実だった。

七歳の江戸川コナンは本当の年齢ではない。本当は、十七歳だ。
しかし、十七歳でも

まだ、人生は始まりに過ぎない地点・・・これからという時だ・・・

哀は、頭が真っ白になり思わず・・・

『・・・工藤君・・・』

と口にしてしまった。蘭は、哀の言葉を聞き逃さなかった。

そうこうしているうちに、ストレッチャーが、手術室から出てき
て今は静かに眠るコナン

に一同は呼びかけた。

『コナン君!』 『江戸川君!』 『コナン君!』 『コナン!』

まだ、目覚めるわけがないと思ったが、一同は自然にコナンの名前を呼んでいた。

コナンは、集中治療室に入れられた。

「皆さん、コナン君が目覚めたら笑顔で接してあげて下さい・・・

コナン君は、手術した時も生きようと頑張っていました。なので

・・・

コナンは、生と死の生の方を必死に辿り、生きている・・・。

一同は、先生の言った事にコクリと頷いた。

- 4 - コナンに降りかかった原因不明の難病（後書き）

今日は、カルタ編の後編ですね！楽しみです

四話は、楽しんでいただけたでしょうか・・・？

とても、不安ですが・・・（文繋げるの下手なので・・・）
次の話は、蘭がメインとなります。

Next conan's Hint

コナンの正体

皆さん、今日は何時くらいに更新するのが都合いいですか？
答え待っています！

・ 5 ・ コナンの正体・・・蘭の願い・・・（前書き）

これから先の話で、登場させてほしいキャラクターはいますか？
答え待っています！

ps

答えて下さった方の言ったキャラクターを絡めようと思っています。

・ 5 ・ コナンの正体・・・蘭の願い・・・

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

集中治療室の中で、規則正しく鳴り響いている機械音がコナンの生きている証と

なっている。これが、乱れてしまったら、コナンは命の危険にさらされてしまう。

一同は、そんな事を考えているうちに緊迫感でいっぱいになった。

コナンは、術後三時間経っても目覚める気配がない。コナンは、青白い顔をし、

目を閉じていた。

コナンはまだ、面会禁止となっていて、一同は窓越しにコナンを眺めるしか、

出来なかった。

蘭は、コナンを見つめながらさっき哀が言った言葉が気になっていた。

.....

「・・・工藤君・・・」

.....

蘭は、あの時の哀の言葉である仮説が立っていた。

「コナン君は、新一……。」

蘭は、心の中で考えていた。心の中には、コナン＝新一だと確信してしまう自分がある。

今までにも、コナン＝新一だと確信した時があった。だが、その度にコナンの口述で、

コナンは新一とは別人だと思ってきた。だが、今回の哀の一言で仮説は確信に繋がった。

コナンは新一だと……。それと同時に更に涙が溢れた。

「……（新一……死なないで……）」

蘭は、心の中でそう強く願い続けた。

博士、哀、小五郎は明日また来ると言って病院を離れたが、蘭だけはその場を

離れなかった。疲れが出たのか、蘭は、待合室の椅子で眠ってしまった。

・ 5 ・ コナンの正体・・・蘭の願い・・・（後書き）

今日も、寒いですねー。アニメのコナンみたいに風邪引かないようにー（笑）

今回の話、コナンの正体ばれました。

ばれた理由が、メチャクチャですが・・・

今日は、土曜日なので夜にもう一話更新しようかなと思っています！

Next conan's Hint

新一との思い出

また、夜に！（・口・*）

・ 6 ・ 新一との過去の思い出（前書き）

今回、蘭と新一（幼い時の）の話です。

ここ、考えるの大変でした・・・

駄文ですが、よろしくお願ひします！

・ 6 ・ 新一との過去の思い出

待合室の椅子で眠ってしまった蘭は、ある夢を見ていた。

―それは、新一とのある思い出だった・・・

― 10年前―

10年前、七歳の時、同級生の友達が亡くなるという事態が起きた事があった。

亡くなった子は、一緒に遊んだりした蘭の友達だった。

七歳という事もあり、蘭はものすごいショックを受けていた。

『……………ヒック……………』

蘭は、帰り道に目が腫れるほど泣いていた。

「……………蘭……………大丈夫か?……………」

新一は、蘭に持っていたハンカチを手渡した。

『ありがとう……』

蘭は、新一に手渡されたハンカチで涙を拭いた。蘭は、新一のハンカチを握り締めた。

しばらくすると、蘭が口を開いた。

『……新一』

蘭は、真剣な顔をして新一の方を向いた。

「ん？」

新一は不思議そうに蘭の方を向いた。蘭は、瞳を揺らしながらこう言った。

『……新一は……新一は突然、らんの前からいなくなったりしないよね？』

蘭は、悲しそうな目で新一を見つめた。新一は蘭に向き直し、言った。

「いなくなるわけねーだろ・・・バ一口・・・」

新一は、少し微笑みながら言った。蘭は、新一のその言葉で元気を取り戻し新一の手を握った。

「んな！何すんだよ！」

新一は、とても真っ赤になっていた。蘭は、微笑んだ。そして、小指と小指を結んだ。

『新一！ぜーったいに約束だよっ！！』

蘭は、新一の顔を見つめて言った。新一は、一瞬目を見開いた後微笑んだ。

「おう！約束だ！」

二人は、共に笑い合い夕日を見上げた。蘭は、その光景にとっても感激していた。

『きれいだねー!』

「ああ!」

しばらく、見つめた後二人は自分の家へと向かう道を歩いた・・・

- 6 - 新一との過去の思い出(後書き)

今夜のコナン、塾でリアルタイムでは見られませんでしたが・・・撮ってますが・・・テレビって漫画とは違う面白さですよー！声と色あるし・・・

今回、幼い蘭と新一の話でしたー！

どんな成り行きだ！って感じなんですがねー・・・

Next conan's Hint

神様・・・

今日、もしかしたんですが、深夜更新するかもです。

次回、お楽しみに！！(0x0¥:)

・7・目を覚ましたコナン、無理矢理笑顔を作る蘭

―集中治療室内―

集中治療室内で、相変わらず目を覚まさないコナンの容態診察を看護婦がしていた。

診察が終わり、外に出ようとした看護婦が一つの異変に気づいた。

それは・・・

今までなんの意識もなかったコナンが、首を少し動かし、シーツを軽く握っていた。

看護婦は、コナンに駆け寄り、コナンに呼びかけた。

『コナン君？コナン君！』

その声の後に、コナンがゆっくり目を開けた。その様子に看護婦は安心したように笑い、

先生を呼ぶため廊下を走っていった。その様子で、目を覚ました蘭はコナンのいる、

集中治療室の方を向いた。そしたら、コナンが目を開けて蘭の方を見ていた。

『コナン君！』

「……蘭ねーちゃん……」

コナンは、いつもの元気な声と裏腹に弱弱しい声のコナンに蘭は、涙が溢れそうだったが

堪え、作り笑顔をコナンに返した。すると、コナンはホントの笑顔で返してきた。

同時に、医師と看護婦が入ってきて、コナンの視界に蘭は入らなくなった。一人の看護婦が

蘭の様子に気づき、声を掛けた。

「今なら、離れても大丈夫ですよ……」

その言葉に、蘭はトイレに駆け込み溜め込んだ涙を一気に流した。一人の少年に起こる現実に、蘭は、涙を流しながら思った。

『（神様!!どうして……どうして新一なの……? どうして、新一をそんな辛い目にあわすの……。）』

そして、今さっきの自分にも罪悪感でいっぱいだった。

『……一番苦しいのは、新一なのに……
私は、なんで安心させられるような笑顔が作れないのよ……』

蘭は、コナンの笑顔に自分が逆に安心させられてしまった。今までと何一つ変わらない

彼の笑顔が蘭を苦しめた。さっき見た夢の事が頭の中に戻ってきた。

『(新一・・・約束したよね？私の前からいなくならないって・・・

だったら、私は・・・絶対諦めない！また・・・元気にサッカーをやる新一を・・・

待ってるからね・・・)』

蘭は、そう決意し、トイレの洗面台で腫れた目を洗い、直ったのを確認し、コナンのいる集中治療室へと向かった。

集中治療室に着くと、スヤスヤと眠るコナンに蘭は安心した笑顔を見せた。

・7・目を覚ましたコナン、無理矢理笑顔を作る蘭（後書き）

今回ののは、蘭がとても悔やんでる感じでしたね・・・
今日は、これで最後です。明日の更新までお待ちを！

Next Conan's Hint

怒鳴る哀と少年探偵団

明日、お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827ba/>

難病と向き合ったから、知り得た事・・・

2012年1月15日00時53分発行